

現

在、市内の森林の多くが成熟期を迎えています。そのうち加工製材用に人が植えた針葉樹林の約8割が樹齢50年以上であり、多くの木材資源が里山に眠っています。この状況を改善するため、林業事業者や製材加工会社、建築士をはじめとする地元事業者が、地域で活用できるような協力し、木材の地産地消に取り組んでいます。

「地域の木材を、地域の暮らしに」をコンセプトに、安曇野市産の木材が、公共施設や一般住宅などの建築材として、徐々に地域で活用され始めています。



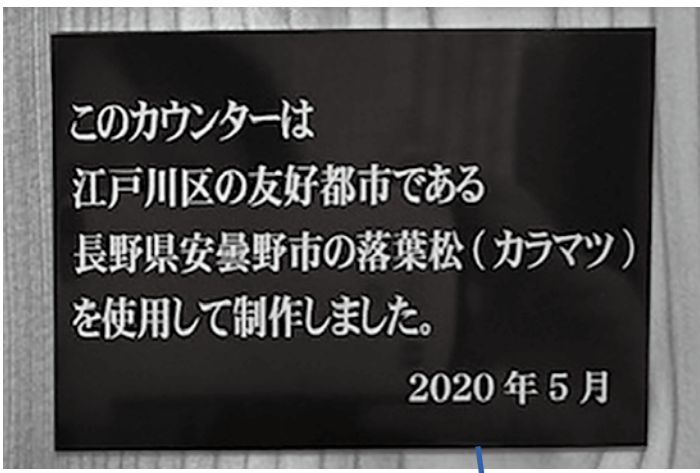
安曇野の木を、地域の暮らしに。



明科南認定こども園 新園舎外観



明科南認定こども園 建物内部



このカウンターは江戸川区の友好都市である長野県安曇野市の落葉松(カラマツ)を使用して制作しました。

2020年5月



江戸川区 共有プラザ中央のカウンター



堀金の伐採現場



J R南豊科駅の駅舎看板と待合室



「みらい」に設置されてるベンチ

地域のよりよい暮らしを担う一役として

市里山再生計画推進の取り組み「さとぶろ。」の里山木材活用プロジェクトにおいて企画・商品化された安曇野産カラマツ2×4材(注1)など、安曇野産の木材を活用した製品が登場しています。

J R南豊科駅の新駅舎にも安曇野産木材が使われています。待合室のベンチには2×4材が、駅舎の看板には、市木であるケヤキ(明科産)の一枚板が使用されています。同駅は、2つの高校の最寄り駅ともなっており、高校生をはじめ多くの人が生活の中で地域の木材に親しんでいます。

これ以外にも、穂高交流学習センター「みらい」やファインビュー室山、江戸川区立穂高荘などで、安曇野産カラマツ材で制作されたベンチや緑台等が利用されています。今後、これら施設に立ち寄った際には、ぜひ地域の役割を担う木に触れてみてください。

健やかな成長を育む環境として

この春に移設された明科南認定こども園の建物内部、床や壁などの多くに木が用いられています。壁の腰板は、安曇野産アカマツが活用されています。クリア塗装で仕上げられた木の手触りや風合いが感じられる建物の中で、園児たちの元気な声が響きわたっています。

かみのある空間になり、きつといい木育につながると期待しています」とのメッセージが寄せられました。

安曇野市と江戸川区が、これからも「木」を通じた交流を深められればと思います。

暮らしの中の「木」が、未来の里へ

里山の豊かな環境は、人の暮らしと自然の営みの中で、長い年月をかけて形成されてきました。かつて私たちは、木材を中心とした建築材や燃料、肥料などその多くの生活資源を里山から得て暮らし、その営みが再生可能な資源の地域循環を生み出していました。

里山と人の暮らしとの距離が大きく開いてしまっている現在、その関わり方に向き合い、新たに模索する転換期を迎えています。さらに近年では、環境への配慮もうたわわれている中、持続可能な資源が注目されています。

市では、里山再生計画の推進事業「さとぶろ。」をはじめ、松枯れ材の積木活用など、里山の豊かな資源を地域の暮らしにつながる取り組みを進めています。地域の再生可能な資源を取り入れた新たな暮らしについて一緒に考えてみませんか。

問

耕地林務課林務担当

☎71・2432 ☎71・2507

(注1) 2×4材とは、木口の厚さが2インチ、幅が4インチの木材規格のひとつ